

自分をさがす 旅にしよう

やすら樹

No.

33

1995 SEPT.

特別記事・親子関係の不思議

発行 自己発見の会

慈悲深い母が家にいるのを

富んでいるといい

そうした母のいないのを

貧しいという

仏典



内観とは

内観とは、身近な人々（母または母親代わりに育ててくれた人、父、配偶者など）に対する自分を調べるために、①していただいたこと②してさしあげたこと③迷惑かけたこと、について、具体的な事実を過去から現在まで調べる方法です。

内観は新しい自己を発見し、人生をリフレックスする自己啓発の方法として役立っています。さらに非行、不登校、夫婦の不和、うつ状態、アルコール依存など心のトラブルに対する心理療法としての価値が認められています。

現在、日本各地やヨーロッパに内観研修所が開かれ、一週間の研修の世話をしています。また一日内観や二泊三日の短期内観、家庭や学校で行う記録内観などいろいろな形態の内観が開発され、内観法は新たな展開を見せています。

親子関係の不思議

弘前・親子内観研修所

竹 中 哲 子

はじめに

三十二年間務めた高校教師を辞めて、内観研修所を開設し、二年が過ぎた。

生死をさまよう大病を患ったことがきっかけで、自分自身を見つめ直すことになった。

集中内観を受けたのは、“迷い”の中にいた自分を救い出すためであったが、まさか自分自身が研修所を開くとは夢にも考えていなかった。

内観は自分自身の親子関係を見つめる作業であり、私にとっては目から鱗が落ちるような体験となった。

今になってわかったことであるが、教職を選



んだことも自分自身の生い立ちと深く関わっており、私の関心は、いつも問題のある生徒に向けられていた。教師の経験から言って多くの場合、問題の生徒は親に対する葛藤があるように思われたが、それは自分自身の問題とも重なっている。

内観するまで、私は、そのことに気づかなかつたし、気づこうともしてこなかった。四度目の集中内観を受けた今、長い間の親との葛藤がすっかり雲散霧消したわけではないが、そのことに気づいたことは、私にとって大きな収穫であった。

“親子関係の不思議”は、自分自身の内観体験を通しての実感であるが、研修所を開設したこの二年間の経験によって、ますますそのことを痛感している。

なぜ“親子”内観研修所か

教師時代から私の関心が問題生徒にあったことは先述したとおりである。

子どもたちの問題行動の背後には、親たちの問題が見え隠れしていた。けれども教師生活の中では、なかなか家庭の問題にまで踏み込んでいくわけにはいかなかった。

内観研修所を開くにあたって、子どもたちの問題を親たちも一緒に含めて考えるようにしたいと思った。“親子”という名称を冠にした理由はそこにある。良きにつけ悪しきにつけても親の影響を受けずに育つ子どもはいないであろう、と思うからである。

研修所の構造と内容

木造二階建ての自宅が親子内観研修所である。内観室には二階の二間を使用している。親子で同時に内観に来ても対応できるようにしている。三〜四人が限度であるが、場合によっては階下

の和室を使うこともある。集中内観は原則として一週間である。年中無休で来所に応じており、内観に入る日も出て行く日も内観者に合わせている。宿泊できない人のためには通いの内観にも応じている。

研修所における諸活動

研修所の主な活動内容は集中内観とその後の日常内観である。

具体的には“めぐみの集い”と“子どもに学ぶ親の集い”があつて、“めぐみの集い”は毎月第四土曜日の午後から内観実習と内観を日常生活に生かす学習会を研修所で開催している。

“子どもに学ぶ親の集い”は、年二回（六月と十一月）問題を抱えている親たちに呼びかけ、懇談会を外部施設を借りて行っている。又“めぐみの集い”の親の会では、内観セミナーや講演会を主催して一般への啓蒙を視野に入れた活動を行っている。第一回は三木善彦先生を、第

二回目の今夏は真栄城輝明先生を迎えた。一、二回とも感動を呼ぶ講演で、非常に好評であった。特に、今回は「ねぶた祭り」一色の時期だったにもかかわらず、内観を受けた子ども達の参加が多く、会場の準備や接待、図書の販売などで活躍した。遅しく成長した子ども達と再会できたことが又、新たな活力となっている。毎に内観の広がり到手応えを感じている。

親子関係の不思議

実はこのテーマは今夏に開催した内観セミナーと講演会において、講師の真栄城先生に依頼して話していただいた講演のタイトルである。私の中で長い間テーマになってきたものだけに、二時間の講演時間が短く感じられた。限られた紙数ゆえ、講演の内容は紹介できないが、親子関係の不思議を具体的な事例をもとに解説していくのを聴いていると、私の中で、もつれてきた糸がひとつひとつ解けていくのを感じてい

た。始めたばかりの活動ではあるが「これで良かったのだ」と支持してもらったようにも感じて嬉しかった。

講演に先立って内観セミナーが行われたが、「親子関係の不思議」をうまく伝えてくれた体験発表がなされたので、発表者・高野美恵子さんの了解を得て、以下に紹介する。

娘と共に歩む日々

——娘が中学一年の三学期に、夫の仕事の関係で青森に転動して来ました。娘は、一カ月半の間に二回学級が変わるといふ状態が不登校の引き金になったと思います。言葉がわからない事などが仲間外れとなり、無視される状態になりました。娘にカウンセリングを受けさせたいと思ひ、保健室のS先生に相談したら、親子内観研修所を紹介されました。さっそく主人と二人で伺いました。初めて耳にする内観。宗教だろうか？と思ひながらお話しを聴いているうちに、

なぜかホッとするものを感じました。先生は、「お母さんも一緒に受けてみてください」と言われましたが、正直言って『私はいいいのです。直してほしいのは娘の方だから……』と思っていましたが、娘のためなら何でもやろうと思っていたので、内観を受けることにしました。意味もわからないままに内観に通いました。それが、娘と私の本当の意味の第一歩でした。内観に入ってから二日目くらいは、母から受けた悔しい思いが先に立って悔し涙ばかり流れて内観になりませんでした。三日目後半頃から、私が母から受けてとても嫌だったこと、悲しかったこと、悔しかったことすべてを、今私が娘にしていることに気づきました。そして、絶対になりたくないと思っていた母と同じ事をしている自分に愕然としました。又、自分の身勝手さ、娘に対する冷たさ、下の子との差別などが次々と見えってきました。これまで私は、自分の都合の良いように考え、自分のことは棚に上げて、学校を

休む娘をただ怒るだけでした。内観したら、私の愛情不足を痛切に感じ、娘に申し訳ないことをしたと思いました。やはり根本は親なんだ。娘は私に「このままではまずいよ」と訴えていたことに気づきました。

しかし頭ではわかったのですが、日常の生活では娘とどのように接したら良いのかわからず、ただオロオロするばかりでした。娘は私の中途半端な姿を敏感に感じ取ってか、猛反発をするようになりました。怒ってはいけないという気持ちと、カッとなる気持ち私の中に渦を巻いているようで、とても辛い日が続き、心身共にクタクタになりました。

私は竹中先生に電話をし、「娘とどのように接して良いかわからない」と話しました。先生は「あなたが内観の時、私に心の内を話したように、そのまま娘さんに伝えてみてはどうですか。内観を受けた皆さんは自分の気持ちを頑張っ

て伝えていきますよ」と話されました。

私はそれだけは出来ない、という思いが強く、なかなか素直になれませんでした。でも「内親を受けた皆さんは頑張っていますよ」という言葉が心に残り、「よし、他の人に出来て自分には出来ないわけではない」といきり立ちました。そんな自分が情けないのですが、その時は夢中でした。おそらくその顔は引きつっていたことでしょう。階段を上がって娘の部屋に行き「お母さんが悪かった。ごめんね」と言ったとたん、

涙が溢れて、後は何も言えませんでした。子どもの前で泣いたことも、謝ったこともない鬼の私が、初めて泣き、謝りました。涙が溢れて仕方ありませんでした。その涙で心の中に突っ張っていたものが、ポキッと折れたような気がしました。今まで私は何に突っ張っていたのだろうか、という思いが一杯になりました。その時初めて内親の意味が少しわかったような気がしました。

その後、めぐみの集いに参加し、日常の問題

を出して具体的な子どもとの接し方を学習しています。まだまだ自分を抑えられない所もありますが、これは畳のひと目、ひと目なんだと思いつながら日々暮らしています。

その後、娘はいじめたい人にはさせておけばいいと考えられるようになり、保健室登校をし、六月半ば頃から体育、美術、家庭科の授業を受けるようになりました。

とても辛い日々でしたが、この頃はこれで良かった、娘に気づかせてもらって本当に良かったと思うようになりました。これが何もなかったら内親に出合うこともなく、鬼の母親をずっと続けていたならば、いったいどうなっていたらうかと考えるにつけゾツとします。これからも又、大波小波が押し寄せてくると思います。娘に学びながら、ひとつひとつ乗り越えていきたいと思っています。いつの日か、家族と「こんなこともあったね」と笑って話したい。それが今の私の願いです。――

この母親の「娘に気づかせてもらって」とか
「娘に学びながら」という言葉に、親子関係の
不思議が見事に語られている。

おわりに

この夏受けた集中内観五日目に、私ははじめ
て心から「この父と母の子でよかったんだ」と
いう心境に至った。そして両親への感謝の気持
ちが湧き出てきたのである。人生の後半を生き
る今、「体力と記憶力は衰えるが、感性や人間
性は死ぬまで磨くことができる」というさおり
(機織)を教えていただいている城みさを先生
(大阪府堺市在住)の言葉に勇気づけられて、
さらなる内観に取り組んでいくつもりである。
ここまで書いてきて「親子関係の不思議」と
いうテーマは私自身のテーマでもあったのであ
る。真栄城輝明先生が講演で紹介された一遍の
詩にいたく感動してしまったが、四度目の集中
内観で味わった心境にピッタリなので最後に紹

介したい。

わたしと小鳥とすずと

——金子みすゞ——

わたしが両手をひろげても
お空はちっともとべないが
とべる小鳥はわたしのように
地面を早くは走れない

私がかからだをゆすっても
きれいな音はでないけど
あの鳴るすずはわたしのよう
たくさんうたは知らないよ

すずと小鳥とそしてわたし
みんなちがって みんないい

健康と内観法（その二十九）

福井県立精神病院長

草野 亮

死 と 内 観

私どもが健康なときには、仕事や日常生活に追われて、自己の内面などというものを、考えたりみつめたりすることもほとんどなく、ただ日々を送っている。病気になって、社会的な生活から身を引いて、静かに横たわるとき、自己の内面との対話が生じてくる。幸いに、内観では、健康な人が病気にならなくても、静かに自分を見つめる機会をもつことができる。人間の一生の間に一度は、このように自分を見つめる時間をもつことが必要だと思ふのである。吉本

伊信師は、内観をするに当たって「死をとりつめて内観するように」とよくいわれた。死をとりつめるとはどのようなことなのか、いくら考えても私にはわからない。

病気が重いとき、あるいは死の問題が近づいたときに、自分を見つめることが多くなるといわれる。生あるものはすべて死をまぬがれない。しかし、私どもが健康なときには、死のことはほとんど念頭に浮かぶことがない。自分が病気になるのはじめて考えるようになるものである



が、その病気が重篤で死に直面すればする程、真剣に考えるようになる。「死をとりつめる」とはそのようなことと関係があるのではないかと考えてもみるが、ますます私には真実のところはわからない。

私は、ノンフィクション作家・柳田邦男氏の「『死の医学』への序章」を読んで感銘した。それは、精神科医・西川喜作氏の闘いの記録である。進行するガンとの闘いのなかで、死を意識しての生き方と医のあり方について、ドキュメンタリー風に描かれている。西川医師は前立腺ガンで初発したが、その発見が遅く、次第に全身に転移していった。二年七ヵ月後の、五十歳で亡くなるまで、患者であると同時に精神科医として、自分の置かれた状況、苦しみ、痛み、死への道程の詳細な記録を綴った。柳田氏は、それを他の事例や多くの資料を挿入しながら、エッセイ風にまとめている。西川医師はその手

記のなかで「転移だと思ふ気持とそうでないと
思ふ気持。この二つの相反する考えが頭のなか
で激しく揺れ動いている。『死ぬことを悟った』
なんて真っ赤な嘘だ。私は死を怖がっている」
と書いていた。私自身も、かつて私の病気の体
験の中で、死の恐怖について悩んだことがある。
私はその時の取り乱しように恥ずかしく思っ
ている。縁があつて生の世界に逆戻りすること
ができた。

柳田氏は、死に直面した人々の手記には「光
への感動」、「目に映る世界の感動」がうたわ
れているということに気づいたといっている。
私どもは内観を終えたときの、われわれの周囲
を取り巻く世界に、その光の感動を経験するこ
とができる。生きながらにしてそれを体験でき
る喜びを、身に沁みてありがたいと感ずるので
ある。

健康と内観法 (その三十)

福井県立精神病院長

草野 亮

続 ・ 死 と 内 観

精神分析学者キュブラー・ロス女史は、死に臨む人が人生の時計の針を逆に回転させるようにして、青年期から思春期、そして幼少期へと追憶の旅をするという。それはとりもなおさず内観に他ならない。病人の介護者がそれをたずけるような相手役をすると、その患者さんは非常におだやかに死を受容する場合が多いということ、**「死と死にゆくことについて」**の報告書で述べている。

死にゆく患者の心理的プロセスに関して、彼



女はつぎのような段階を指摘している。はじめに、死に至る病が察知されたり、告知されると「否認」する態度がみられ、ついで、猛烈な死への反抗・拒否がくる。何日も、ものをいわない、落ち込む、心を閉鎖する。否認しても怒っても駄目であることがわかると、しだいに口数も少なくなうつ状態に移行する。だが、やがて死との和解がはじまる。死と対面して、死を認め、死を許容し、死と和解した後に、平安な精神状態となる。この「死の受容」のもとで、やすら

かに死んでいくことが多いという。

柳田邦男氏は「『死の医学』への序章」という本の中で、精神科医西川喜作氏のガンの体験を書いていいる。西川医師は、前立腺ガンを初発したが、しだいに全身にガンの転移を起こし、二年七ヵ月間の闘病生活を送って、この世を去った。彼は「やはり死ぬのは怖い」と日記に書いた。「(ガンの)転移だと思ふ気持ちとそうでないと思ふ気持ち。この二つの相反する考えが頭のなかで激しく揺れ動いている。死ぬことを悟ったなんて真っ赤な嘘だ。痛みを感じ不安がっているのは死を恐れているからではないのか。私は死を怖がっている」と苦悩の気持ちを赤裸々に述べている。彼はそのような悩みの後に、「その人の生き方や人生の一つの姿として現われたのが、病であるとするなら、それを友として生きていくという考え方が大事ではないか。病を見つめることによって生きることの意

味や喜びが、よりはっきりとわかってくる」という心境となった。また「病気を機に生き方、人生の目的を考えられるし、真の幸福についても考える時間があるのではないか」と考えるようになった。彼はまた「死を前にしての、生へのチャージとは、随分おかしなものと思われようが、死ぬ前こそ、人間としての真価が本当に現れるものと思う」と述べている。

死を前にして、急速に心は高められ深められていく。死ぬ間際の人は、非常に透明で、周囲を反映しやすい心の状態になっているという。死に直面する者には、私どもの精神世界を越えた、はかりしれない内的な豊かさを感じるという。死をとりつめてする内観とは、それに類似するところまでつきつめることではないかと想像するのである。

憂きことをクラゲに

大阪 大学 教授

三木 善彦

★ ひよんなことから

昨秋、日本心理臨床学会の大会が京都であった。書籍の展示販売コーナーをのぞいて、ブロン出版の人とひよんなことから話がはずんだ。読売新聞の「人生案内」のコピーを見せたら、「これはおもしろい。一般の読者にはもちろん、カウンセラーにも参考になると思います。ぜひ出版させてください」という申し出。

「やすら樹」誌上でも「人生案内の窓から」で連載させていただき好評のようで、知人のカウンセラーからも「まとめて出版しては？」と勧められたので、喜んで承諾した。

★ 七〇の問いと答えを収録

ここ十年分の私の回答は約四五〇になるうか。そこから代表的な七〇の問いと答えを選びだし、七章に分類した。

第一章 仲よく暮らしたいのに（親子、兄弟、

祖母と孫などの人間関係のトラブル）

第二章 気軽に話せたら（友人、先生、異性と

の間関係の悩み）

第三章 どの道を行けば（進学、就職、生きが

いなど選択の苦しみ）

第四章 楽しく働いたら（職場での人間関係の

トラブル）

第五章 愛したいのに（恋愛の相手がいない寂

しさ、恋人への不信、不倫の恋など）

第六章 苦楽を共にしたいのに（配偶者への幻

滅、不信、離婚の危機など）

第七章 障害がなかったら（心身の障害、病気、

運命などにまつわる苦しみ）

こうして並べると、人生の時々で私たちはさまざまな悩みに直面することがわかる。

★ ブック・デザインについて

問いと答えの選択をしていたのは、昨年の冬。忙しくなると私は大学の研究室に泊り込んで仕事をやる習慣がある。当時は神戸芸術工科大学に勤務していた。夜更けに仕事に疲れて窓を開けると、大学院棟の最上階に灯がついていた。そこはラウンジになっていて、飲食をしてもよい場所である。

誰か呑み友達がいるかと、そこに行くと、大学院生の小林元君が食事をしていた。彼は卒業制作で学長賞をもらうほどの優秀な学生で、今春卒業すると、デザイン事務所を開設するという。

「ブック・デザインもしてくれるかな？ ちょうど本を出版しようとしているのだが」というと、彼は「是非とも」と乗り気になった。

そして彼は大きな書店の心理学コーナーを観察し、目立とうとして赤や蛍光色で攻撃的な書物が多いが、私の本は自分と対話する本であるから、表紙は落ちついた色調にし、本文は余白を生かしたものにしたいという。「静けがしみ

込んでいく、清涼剤のような本ですよ」というのが彼のセールスポイントである。

★ 題 目 に つ い て

人生のさまざまな問題に苦しむ質問者に対して、私はその人が自分を見つめる視点を提供したいと思っています。私だって人生の達人ではありませんし、唯一絶対に正しい答えを知っているわけではありません。

私のヒントを参考にして、質問者がじっくりと自分の心を見つめると、おのずと答えは自分の中から浮かび上がってくるのではないでしょう。じつは内観法はその極意を伝えているように思います。

そこで、本書は『答えは自分の中に——人生案内の窓から——』という題目にした次第です。「憂きことを クラゲに語る ナマコかな」これは江戸の俳人・黒柳召波の句。ナマコだって悩むのです。相談相手もちゃんといふのです。相談したり、相談されたり、悩みはふたりの心を成長させます。一五〇〇円です。ご講読を。

自己啓発

— (二十八) —

昭和薬科大学教授

楠 正三

内観ロールプレイング (3)

荷物運びのアルバイトをしている大学生が、周囲の人々は自分の顔を見ると不快になると感じて苦しんでいます。母親はただ「お前のわがままで」と言うだけで、大学生の苦しみをわかってくれません。

内向的な人は外向的な人から見るとごくフツウのつき合いをするにも、時には大変な苦痛を感じます。心の内側で、目には見えない葛藤が起こっているのです。葛藤に注意を奪われますと、肝心の現実が見えなくなります。この内的苦しみをしばらく括弧に入れて、もっと大きなハートに注意を向けることが大事です。

内観は一つの手がかりを与えてくれます。しかしこの大学生には内観する心の余裕がありません。そこで、私達がかわりにNRPをします。まずこの大学生の苦しみに注意を向けますと、浜田広介童話の「泣いた赤おに」を連想します。人間共と仲良くしたい赤おには家の戸口に貼り札をします。「どうぞ遊びに来てください」でも人間共は赤おにを恐がって来てくれません。そこへ青おにが、すげだちに來ます。まず青おにが人間の家に行き、大暴れします。隠れていた赤おにが飛び出して、青おにをやっつけます。人間共は赤おにが「良いおに」だと安心して、大勢遊びに来てくれるようになります。ある日、赤おには山奥の青おにの家に行きます。青おにの家にも、貼り札がありました。「赤おに君、ぼくはしばらく旅に出ます。人間共と仲良く暮らしてください。青おにより」赤おにはこれを見て泣きました。おろん、おろんと泣きました。

私達は小さい頃、「泣いた赤おに」を読んで感動しました。同じ感動がこのNRP（内観ロールプレイング）に勢いをつけてくれました。

つぎは大学生男女三十四名が行ったNRPです。
「俺の顔」NRP 夢の航海長 青木大祐

私は自分の顔が人に嫌悪感を与えていると思う。母親に相談したら「わがままだ」と言われました。確かにわがままかもしれません。私はこの世に生をうけ、今まで育てていただいて、母親に普段より心配していただいて、もしかしたら、他人とまったく違う個性的な顔を作っていたのだ。人間は顔ではない」という事を、私は母親に教えていたのだ。私は何よりもまず、いまここに生きている。私を生んで育てていただいたのに感謝もせず、母の言葉に対してひねた気持ちでつらくあたり、「どうしてこんな顔に生んだんだ」などと言い、よりいっそうの迷惑と心配を返してしまっただけ。でも私は、これまでグレたこともなく、母の手助けをしたり、時には心の支えになったり、成長を楽しんでもらったり、この顔にもめげず、自ら命を立つこともなく今まで生きてきました。

結局私は、自分ばかり不幸だと思ひ込み、「この顔ではまともな生活もできない」などと言ひ、母の勇気づけの言葉や、ひいては、自分

の存在までも否定して母に迷惑をかけてしまいました。

これからの私はどのようなしたら良いのか。まず、顔の事で母を責めるのは止めようと思ひます。そして自分の顔に少しでもいいところを見つけてみようかと思ひます。何かで「何かを一生懸命頑張っている人は、容姿を越えた輝きがある」と言う言葉を聴きました。その言葉を信じて、勉強や、アルバイトや、自分の出来ることに積極性を持ち、もっと堂々と胸をはって生きて行こうと思ひます。

そしてどんな小さな喜びでも大切にします。そうすれば、自信をもって、笑顔で人に接することが出来るだろう。もしかしたら他人に嫌悪感を与えているのは私の顔ではなく、私のコンプレックスからくる卑屈な態度かもしれない。もしも何か困ることがあれば、友人に相談することも出来るし、いざとなったら、最後には整形という手段もあります。そう考えると希望が出てきました。明日からは少しずつつくりと前向きに変わっていこうと思ひます。

次回は役割交代法をご紹介します。

貧しい母から盗む

・瞑想の森内観研修所

清 水 志 津 子

身調べの いのち解け合う ものがたり

ひねもす聞きて 心 洗わる (鶴声)

はじめに

面接をしていて、内観される方々の魂の告白は、すべて私自身の内心の告発として深く心に染み通り、尊く有り難く、心奥より伏せ拜せずにはいられません。

どのような場合でも尊さに変わりはありませんが、面接させていただいた体験の中から、心に残ったひとコマをこれから少しずつ載せてゆきたいと思います。

Aさん(女性―三十二歳)は、お父さん・お母さん・恋人への怨みに悩み、体調が非常に悪い状態で来所されました。

【嘘と盗み】(内観六日目)

◆お店で、十円の鉛筆を盗みました。

頭では、これは絶対悪いことだとわかっているのですが、心から本当に悪かったという気持ちになれない。先生に相手の立場に立ってと言われていたのですが、父や母なら立てるけれど、知らない店の人の気持ちになれないと思って、いらいらしてしまっ、内観が出来なくなっていました。そして気持ちを押さえてトイレに行こうとしたとき、はっと思いました。

私はたった十円の鉛筆と生きていたけれど、その積み重ねがそのお家の収入で、それが生活費だったので。私はその家の生活費を盗んでいたんです。そう思ったら、恐ろしくなりました。私がこんなことぐらいと考えていたことが、相手の立場になったら、大変酷いことをしていたということに気がきました。そうしたら、今まで生きてきた中で、私が何気なくしてきたことや、こ

れぐらいと軽く考えていたことが、相手にとって大変な迷惑になっていたことが沢山あったに違いないと、本当に恐ろしくなりました。すみませんでした。

◆小学校低学年の時、私は、母が大切にしていた庭の樹の枝を誤って折ってしまいました。母が「あなたがやったの？」と聞いたとき「私じゃない」と嘘をつきました。

そして思い出したんですけど、母は私が小さい時から、毎日庭の土いじりをしていました。その頃父はアルコール中毒で、母は毎日とても辛い思いをしていたと思います。庭の花を育て、樹を育てることが、その頃の母の唯一の心の慰めだったと気がつきました。私は、嘘をついたばかりじゃなく、母の大切な木の枝を折ったことで、母の心も折ってしまいました。本当にすみませんでした。

◆小学校の高学年の頃、私は、母の財布から、よくお金を盗みました。最初の頃は、「落としのかしらねえ」といつてしょんぼりとして諦めていましたが、何回かするうちに、私や姉の机を探すようになりました。（これではいけない）と思って、一度母の財布からその引出し

の下の方にお金を落としておいて、母が見つからなくて諦めた頃を見計らってそのお金を盗るということまでしました。

母はいつも汚い格好をしていました。私はそんな汚い母が嫌でした。母はお金を使うことを嫌がっていました。自分の着物を買いませんでした。私が小学四年の時父が死んで、姉達が中学校を出るとすぐに働いていました。母は身体が弱くて働けず、それでも皿洗いなどの仕事を少ししたのですが、やはり続きませんでした。母のお財布の中のお金は、そんな中のお金でした。いつの間にか母は、私が盗ったとわかったのだと思います。姉達の前に手をつけて、「Aちゃんが可哀相だから、お小遣いをあげてくれないか。お願いします」と頭を下げました。私は母の大切に使用しているお金を盗んだばかりでなく、母に、親でありながら自分の子供に両手について頭を下げさせることまでしてしまいました。その時の母の気持ちを見ると、本当に申し訳なくて……。ごめんなさい。すみませんでした。（「すみませんでした」という言葉は、溢れる涙と共に心の底から絞り出されるような声でした）

池上吉彦 湯の里分校の内観者たち(30)

成績もよく、素直な、スポーツの得意なR子の生活が崩れはじめたのは、中二の終わり頃からで、父親が暴力をふるえばふるうほど、その度は増すばかり。ほとほと困り果てて「心の相談教室」のH氏にたどりつき、両親が内観をされます。

そしてR子を湯の里分校に入学させますが、制服も教科書も購入していながら通ってきませんでした。しばらく在籍にして待ち、I先生が母親との相談活動を続け、翌年定時制高校に通い始めたことを、前回「姿なき生徒」として紹介しました。

その弟の六年生のY介が湯の里分校の内観実習室の内観者になったのは、姉の合格通知直後のことでした。姉のような道は歩ませたくないという両親の願いばかりではなく、本人のやる気も相当なもので、さすがに、少年野球の全国大会に出場し、キャプテンとして活躍した少年だけのことはあります。

一番初めに流した涙は、お姉ちゃんさえいなければ、この家



は平和なのにと思い続けたことへの自責の涙でした。自分のことばかり考えていて、お姉ちゃんの気持ちなんか考えもしなかったと肩をふるわせていました。

そして、五、六年の頃、お母さんに「早く離婚してくれ」とせがんでいた自分の姿にも涙しました。

さらに、父に対しては、やりたくもない仕事を家族のために辛抱してやってくれ、そのために酒だ暴力だとなるので気の毒だという一定の理解を示し、しかし僕は父のような生き方はするまいと思うと述べました。

中学でも野球を続けています。最近、二年生のひ弱な部員がいじめられているのを見かねて、同調する同級生を引き留め、母親を通じて学校と話し合い、解決への糸口をつけるなど、立派な成長を見せてくれています。

湯の里の姿なき生徒R子のおかげで、内観に触れる縁が親に生じ、弟に生じる不思議さをしみじみ味わうI先生です。

(筆者は高校教諭)

